

植物防疫講座

虫害編-6

ツマグロヨコバイの発生生態と防除

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業研究センター

ひら え まさ ひろ
平 江 雅 宏

はじめに

ツマグロヨコバイ *Nephotettix cincticeps* (Uhler) (カメムシ目:ヨコバイ科) (図-1) は、国内では東北以南で発生する。本種は、イネを吸汁加害し、イネ萎縮病、イネわい化病を引き起こすウイルスや、イネ黄萎病を引き起こすファイトプラズマを媒介する害虫として知られる。また、北陸地方や東北地方では本種発生量の年次変動が大きく、イネの出穂前後から多発生した場合、茎葉や穂を吸汁したり、上位葉や穂に付着した排泄物にすす病が発生して黒く汚し、不稔や登熟不良、品質低下などの被害をもたらす (図-1)。本種の発生面積は近年減少傾向にあるものの、依然として全国的に発生が見られる (図-2)。イネ萎縮病、イネ黄萎病は 1960~70 年代に国内で多発生したが現在はほとんど発生が見られない (図-2)。

I ツマグロヨコバイの発生生態

1 形態・发育

ツマグロヨコバイ成虫の体長は、雌は 6 mm、雄は 4~5 mm である。翅は緑色で、雌の翅端はうすい褐色であるのに対し雄では黒色である。卵はバナナ型でイネの葉鞘内に数粒~十数粒ずつ並べて産卵される。温度 25℃、長日条件下において卵期間は 10~11 日、幼虫は 5 齢を経て雌は 18~19 日、雄は 17~18 日程度で成虫になる (奈須, 1963)。年間発生回数は地域によって異なり、南九州では 5~6 回、西日本では 4~5 回、関東では 4 回程度、東北では 2~3 回である。本種はイネ以外にもスズメノテッポウ、エノコログサ等多くのイネ科植物を寄主とする。幼虫休眠し、主に 4 齢幼虫が水田畦畔や雑草地等にあるイネ科植物で越冬する。越冬世代成虫は 3~5 月に出現し、早期水稻やイネ科雑草に飛来し産卵する。



図-1 ツマグロヨコバイ雌成虫 (上) とすす病の被害 (下)

2 近縁種

国内におけるツマグロヨコバイの近縁種としては、九州以南で見られるタイワンツマグロヨコバイ *N. virens* やクロスジツマグロヨコバイ *N. nigropictus* が知られる。タイワンツマグロヨコバイは熱帯アジアではイネツングロ病を引き起こすウイルスを媒介する重要害虫とされている。

3 休眠・越冬生態

ツマグロヨコバイの休眠は、日長条件が主働的役割をもち (奈須, 1958)、温度条件も関与している (KISIMOTO, 1959)。日長感受期は、眼点形成期の卵であり、幼虫ふ化前の 3 日間に短日になると休眠が誘起され、短日条件

Ecology and Management of Green Rice Leafhopper, *Nephotettix cincticeps*. By Masahiro HIRAE

(キーワード: 水稻害虫, ツマグロヨコバイ, 発生生態, 被害様式, 管理法)